中高ドイツ語構文 "beginnen＋Inf." について

清水朗

0 問題提起

現代ドイツ語で動詞 beginnen が zu-Inf. とともに現れ、複合的動詞表現として「～し始める」という意味をもつことはドイツ語を少しでも学んだ者には良く知られている事実であり、これを英語の "to begin＋to-Infinitives" とパラレルに解釈することもまたよく行われることではないかと思われる。

ところで、この場合 beginnen と共起する zu-inf. の不定詞としてどのような種類の動詞が考えられるのだろうか。筆者が Klappenbach, Duden, Brockhaus-Wahrig, Trübner の独独辞典及び現在主に大学の授業で使用されているいくつかの独和辞典を見た限りでは、次のような意味的グループに属する動詞の不定詞が例文中に取り上げられている。

1 「発話」に関するもの：berichten, reden, singen, sprechen
2 「発話」以外の「能動的行為」に関するもの：arbeiten, bauen, lesen, sich vorbereiten
3 「感情の表出」に関するもの：lachen, weinen
4 「思考」に関するもの：verstehen, zweifeln
5 「状態変化」に関するもの：abreißen, rosten, alt werden
6 「自然現象」に関するもの：regnen, schneien

1～6までの順序は恣意的であり、自動詞と他動詞の区別もしていない。また1～4が比喩的な表現を除けば専

ら「ヒト」を主語とするのに対し、5にはrostenのように「モノ」を主語とするものとabreißen, altwerdenのように「モノ・ヒト」の両方を主語とし得るものがあり、6では「自然現象」を表現する際のesが主語にくるのが普通だろう。

このように上記の動詞群の統語的・意味的性格は様々なのだが、その反面、すべてある程度の時間的継続性をもつ「行為」あるいは「状態（の変化）」を表している点では共通している。言い換えれば、ここには恒常的な「状態」を表すseinやbleiben（〜であり続ける）、あるいは瞬間的な「行為」や「状態変化」を表すfallenやschnappen（〜をパッと捕らえる）は登場してこないのである。いわゆる「アスペクト」の観点から見れば、1〜6のグループは「恒常性をもたないimperfektiv（未完了相）」と「瞬間的でないperfektiv（完了相）」を含んでいることになる。(1)

さて、これらの動詞がzu-inf.となり、beginnenの定形と共起すると、現代ドイツ語文法の理解では、まさに「始まる（始める）」の意であるinchoativ（あるいはingressiv：「始動相」）として複合動詞表現全体が位置付けられる。そして「始動相」とは「瞬間的性質を持つ完了相」の一つとされるものである。

つまり、ここまで述べてきたことより、現代ドイツ語における"beginnen＋zu-inf."の文法的機能は「恒常性をもたない未完了相」あるいは「瞬間的でない完了相」というアスペクトをもつ動詞を「瞬間的性質をもつ完了相」へと転じることだ、と言える。(2)

ところで今、中高ドイツ語（Mhd.）に目を向けてみるとどうだろうか。中高ドイツ語にも確かに"beginnen＋Inf."という（現代語のように普通ze(＝zu)は伴わないものの）(3)表現があり、現代語と同様「〜し始める」という意味で解釈可能に見える例も多く、実際にPaul/Wiehl/GrosseによるMittelhochdeutsche Grammatik第二十三版には、「未完了相の（imperfektiv）」意味をもつ動詞がbeginnenと結びつくことにより「始動相の（ingressiv）」意味をもつことになる、という記述がある。(4)しかしその反面、中高ドイツ語では「瞬間的性質をもつ完了相」の意味をもつはずの動詞もまたbeginnenと共起することがまれではない。(5)そうした例に

は一つの行為を何段階かの時間的継起として把えた "enumerative Redeweise" あるいは「動詞表現の強調（"Intensivierung der verbalen Aussage"）」[6]の可能性があるとされたり、beginnen と共起する動詞のアスペクトに制約された「細かい意味上のニュアンス（"feine Bedeutungsnuance"）」[7]をもつと説明されもしている。しかし「細かい意味上のニュアンス」とは具体的には何なのかは説明されておらず、"enumerative Redeweise" や "Intensivierung der verbalen Aussage" という表現も言語体系との関連を欠いた、いかにもアトランダムなもの、という印象は免れない。

本稿は以上略述した文法記述に対し、中高ドイツ語における動詞 beginnen の用法をより広範に視野に入れた上で、"beginnen＋Inf." の文法的機能を統一的に――つまりより一般的なパースペクティブから――記述できはしまいか、という問いかけを行うものである。コーパスとしてはその均一性を保つため、Das Nibelungenlied（以下ＮＬと略記）と Hartmann von Aue の諸作品（以下「ハルトマン」と略記）[8]に限ることとする。

1　中高ドイツ語における "beginnen＋Inf." 使用の実態

まず、中高ドイツ語で beginnen がどのような動詞あるいは名詞とどのような頻度で用いられているかをＮＬとハルトマンをもとに示しておこう。ＮＬでは "beginnen＋Inf." が総数で百五十六例、ハルトマンでは二百二十例見出されるのに対し、名詞を目的語とする場合（この時目的語が属格であることに注意）はＮＬで十一例、ハルトマンで十九例と極端に少なく、その場合も strîtes, eines spils, der rede のような Verbalabstrakta（動詞から派生した抽象名詞）か、turnierens のように動詞がそのまま名詞化されたものが多いことにまず注目しておきたい。[9]

beginnen が不定詞と共起する場合に関しては、とりあえず前述の現代ドイツ語の1～6の区分に基けば、以下のような分布を示す。

1「発話」に関するもの：ＮＬ　三十五例、ハルトマン　四十五例

2　「発話」以外の「能動的行為」のうち「場所の移動」に関するもの：NL　十九例、ハルトマン　三十一例

3　「感情（の表出）」に関するもの：NL　四十一例、ハルトマン　五十二例

4　「思考」に関するもの：NL　一例、ハルトマン　五例

5　「状態変化」に関するもの：NL　一例、ハルトマン　二例

6　「自然現象」に関するもの：NL　四例、ハルトマン　五例

計　　NL　百一例、ハルトマン　百四十例

それぞれの計がNLの総例数百五十六例、ハルトマンの二百二十例にかなりの程度及ばないのは、2の「発話」以外の「能動的行為」を「場所の移動」のみに限ったことが一因で[10]、それ以外の「能動的行為」をこれに含めれば例数はかなり増加し、例の相当部分が最終的には1から6のどれかに区分され得るだろう。そしてその限りでは、現代ドイツ語の"beginnen＋zu-inf."の使用傾向との大きな違いはないかのように見える。

しかし重要なのは以上のような――かなり大雑把ともいえる――例数そのものではなく、その内実である。実は1～5の各項目中にも、現代ドイツ語ではbeginnenと共起する奇異な感を与える動詞が少なからず含まれているのである。それを以下項目別に概観してみたい。

1　「発話」に関するもの：総例数は八十例とかなりの数に上るが、この中には現在でも頻繁に使用されるだろうsprechenやredenといった専ら「発話行為」に焦点のある動詞（総計三十七例）の他にvrâgen（尋ねる）、vlêhen（懇願する）、biten（頼む）という「発話」そのものよりも「相手から（「答え」・「モノ」といった）何かを要求する」という点でむしろ「要求」という下位項でくくることのできる動詞が多く（総計四十二例）、数的にはむしろ前者を上回っている。後者は現代ドイツ語では「完了相」と把えられることが多く[11]、これらとbeginnenの共起は余り見かけられない。

2　「場所の移動」に関するもの：「発話」以外の「能動

的行為」の中で特に例数の多さ（総計五十例）に注目したものだが、頻繁に現れるものの中で gâhen（急ぐ：総計十七例）が際立って多く、gân（行く：総計五例）、riten（［馬で］行く：総計五例）、entwichen（逃げる：総計四例）等を大きく引き離している。いずれにせよ、現代語の "sich beeilen（急ぐ）" や gehen, reiten が beginnen と共にこれほどの頻度で用いられるかはすこぶる疑問である。

3 「感情（の表出）」に関するもの：現代ドイツ語の例は lachen, weinen と双方とも感情が実際に外に向かって「表出」されるケースであったが、NL とハルトマンでは怒り（zürnen, wüeten, toben）や悲しみ（trûren, truoben, beswaeren）、不安・恐れ（sorgen, fürchten）、欲望・愛（gern, minnen, lieben）等、内面的感情そのものを表す動詞と共起する場合（NL 二十例、ハルトマン 二十一例）が多い。さらに、1 の項の中で「対人関係」に焦点を合わせた「要求（vrâgen, vlêhen, biten）」に近い意味をもつ（be）klagen が少なからぬ頻度で（NL 四例、ハルトマン 十五例）見出されることは注目に値する。これも現代ドイツ語との対比において顕著な相違を示しているものといえるだろう。

4 「思考」に関するもの：中世文学、特に NL のような Heldenepos（英雄叙事詩）においては登場人物の内省よりはその外的行動が描かれることが多いためもあってか、純粋に「思考」に関わる動詞と beginnen が共起する例は殆ど見られないが、NL に denken の例が一例、ハルトマンに（ge）denken, bedunken, zwîfeln の例が計五例見出された。

5 「状態変化」に関するもの：総数で三例と少なく、すべて müeden, muoden（＝müde werden）の用例だった。

6 「自然現象」に関するもの：NL に kuolen, tagen（計四例）が ez を伴って現れ、ハルトマンに der tac を主語に sîgen と liehten（計四例）、die wolken を主語に ûf gân（一例）を動詞部にもつ例があるが、これを見る限りでは現代語との大きな違いは見当たらない。

以上の項目に関し、特に1～3に現代ドイツ語の

"beginnen＋zu-inf." の用法との目立った差異が認められ、その中でも1と3の「対人関係」に焦点が合わせられている「要求」と「感情」の項は互いに共通点を持つのではないかと考えた。

さらに、前述の1～6のグループに含まれないもののうちで、注目に値するものとして、「知覚」に関わる動詞群がある。「見る」ことを中心としたこのグループはNLで六例（schouwen 一例、an...kapfen［＝anstarren］一例、an...sehen 二例、losen［＝lauschen］一例）、ハルトマンで十三例（ahten 四例、an(e)...sehen 三例、schouwen 四例、sehen 一例、ûf...sehen 一例）と頻度の面からいっても前述の4～6のグループを上回っている上、現代ドイツ語ではbeginnenとの関連で余り頻繁に用いられないと思われるものである。これは現代語で例えばschauenという動詞が「瞬間的な行為」を表すために用いられることが多い[12]、という事実の裏返しではないかと考えられる。さらにこの関連で言えば、アスペクト的にはむしろ瞬間的な「状態変化」を表すと考えられるmüeden, muoden（双方とも"müde werden"）がNLに一例、ハルトマンに二例見られ、数的には限られているものの、現代ドイツ語の語感からするとこれも奇異な感を抱かせる例といえよう。

2　中高ドイツ語における beginnen 及び他の属格目的語を支配する動詞の意味特徴

前節ではNLおよびハルトマンに見られる"beginnen＋Inf."の用例の全般的傾向を概観し、その際現代語との目立った差異を指摘した。

さて、ここで前節の冒頭で既に少し触れた、beginnenが属格の目的語と共起する場合に注意を向けたい。総例数はNLで十一例、ハルトマンで十九例と、不定詞と共起する場合よりもはるかに少ないが、目的語の中にはVerbalabstrakta（NL 五例[13]、ハルトマン三例[14]）や不定詞がそのまま名詞化している場合（NL 一例[15]）が少なからず見られ、それ以外にも属格の代名詞（de)sが実際にはturnieren, strît, ritterschaft, jâmer等の「行為」や「感情」を指していたり、またdazに率いられる副文の内容[16]を指していることが多い。さらに、中高ドイツ語の"beginnen＋Inf."はze(＝zu)を伴わない場合が殆んどなので、第1節で扱った諸例と今挙げた属

格目的語と共起する例との間の差異は形式的にも現代語におけるよりも小さかったと考えられる。

beginnen が不定詞と共起する場合と属格目的語と共起する場合との意味上・構文上の親縁性について確認したが、それを踏まえた上で、今度は中高ドイツ語で属格目的語を支配する動詞全体の意味特徴との関連において "beginnen＋属格目的語" の意味の考察を行ってみる。

筆者は以前中高ドイツ語の動詞を「項数」（つまり主格をも含んだ「補足成分」の数）別（「一項述語」から「三項述語」）に分け、それぞれの項の内容によりどのように意味の違いが現れるのかを考察したことがある。[17] 本節の対象である "beginnen＋Gen.（属格目的語）" は「項数」の基準に従えば、「主格」と「属格」を項とするので「二項述語」に分類されるが、前述の拙論では「二項述語」を「二項間にどの程度の「他動性（Transitivität）」の関係が含まれるか」[18]という基準によって分類を行った。分類方法は角田太作に従い、「1・直接影響（例：殺す、叩く）、2・知覚（例：見つける）、3・追求（例：待つ、探す）、4・知識（例：知る、分かる）、5・感情（例：愛す、好き）、6・関係（例：持つ、ある）、7・能力（例：できる、強い）の7分類であり、そこでは1から7へと「他動性」の度合いが低くなってゆく。[19] この分類に従うと中高ドイツ語の「主格＋属格」を「項」とする述語は4類（知識：gehügen［思う］、vergezzen［忘れる］等）、5類（感情：(be)dürfen［要る］、wünschen［望む］等）、6類（関係：enbern,darben［（双方とも）欠く］等）が圧倒的に多く、またこの傾向は形容詞とともに属格名詞が主格名詞に対する「述語内容語（Prädikativ）」として用いられる際にも変わらない（4類：wis［～を知っている］、5類：snel［～に対して勇敢な］、verzagt［～に対して臆病な］、6類：bar［～を欠いた］、schuldic［～に責任のある］、等）。[20] これらの例は、このグループに属すのは「状態述語」（つまり広義の「未完了相」の述語）が大多数であることを示している。[21]

するとこの事実は、やはり「主格＋属格」を「項」としてもつ動詞 beginnen もまた「未完了相」[22]の動詞であるという可能性を示唆している。「beginnen＝始動相＝完了相」という従来の図式からすると逆説的に見えるか

も知れないが、beginnen が他の動詞の不定形と共起すると、全体としての意味は不定形で現れる本動詞の「完了」を含意することは決してない、という事実にここでは注目すべきである。つまり、beginnen はある「行為」や「状態」の始まりのシグナルとなるかもしれないが、その「行為」や「状態」が「完了」したことを表さない。そして今述べた「主格＋属格」を項としてもつ述語の意味特徴からすると、むしろそれが「未完了」であることを必然的に含意することになるのではないかという推測が成り立つのである。

この推測を裏づけるために、比較的例数が多く、かつ第一節で「現代ドイツ語では beginnen との共起は疑問」とされた動詞の用例からいくつかを引いてみたい。

1　「発話」に関するもの

Erec dô vrâgen began/wiez hier umbe waere getân. (Er 8777-8779)

dô widerredete iz Sîfrit,/der vil küene man,/unz daz in Gunther/sêre vlêgen began. (NL 534. 5-8)

2　「場所の移動」に関するもの

[…],/si begunden dar gâhen,/wand sî sî gerne sâhen/sô vriuntlichen gebâren. (Iw 7511-7513)

der wirt mit sînen vriunden/selbe riten began. (NL 810. 7-8)

3　「感情（の表出）」に関するもの

Kriemhilt diu vil schoene/vil sêre zürnen began. (NL 823. 7-8)

Sus beginnet er trûren unde clagen/unde sînem gaste sagen/sô manec armez maere/ […] (Iw 2845-2847)

4　「思考」に関するもの

Ê daz si reht' erfunde,/daz iz waere ir man,/an die Hagenen vrâge/ denken si began,/wie er in solde vristen ; (NL 1008. 1-5)

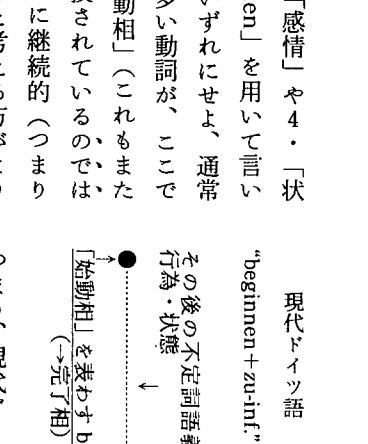
5　「状態変化」に関するもの

als er getjostierte genuoc/und mit dem swerte gesluoc/unz daz er muoden began,/durch ruowe entweich er von in dan. (Er 2630-2633)

いずれの例もそのまま現代ドイツ語に訳すと多かれ少な

かれ「余剰」の感があるもので[23]、3・「感情」や4・「状態変化」ではむしろ「形容詞＋werden」を用いて言い換えられることが多いようである[24]。いずれにせよ、通常は「完了相」として扱われることの多い動詞が、ここではbeginnenとの共起によって「始動相」（これもまた「完了相」の一種であったが）に転換されているのではなく、それぞれの行為・感情がまさに継続的（つまり「未完了相」として）表現されていると考える方がより合理的ではないだろうか。その際、それが「開始された」というニュアンスの濃淡は各動詞・各文例によって様々であるかも知れないが、少なくとも上述の諸例ではそのニュアンスは強く前面に押し出されてはいない。

以上のことから、現代語における"beginnen＋zu-inf."と中高ドイツ語における"beginnen＋Inf."のアスペクト上での相違を概念図で描くとすれば次のようになろう。



つまり、現代ドイツ語ではある行為・状態（破線で表す）が「開始される」点にアクセントがおかれ（黒点で表す）、全体として「完了相」と理解できるのに対し、中高ドイツ語では、開始そのもののニュアンスをまったく含まぬではないにせよ（白抜き点で表す）、アクセントはあくまでも一度開始された行為・状態の継続（実線で表す）におかれている、と考えられるのである。

この仮説を支持するものとして、前述の諸グループには属さないが、第1節で触れた「知覚」動詞とbeginnenが共起する例が数例あるので、そのうちのいくつかを挙げておく。

er hôrte wazzer giezen/ (losen er began) /in

einem schoenen brunnen; (NL 1533. 3-5)

Nu begunder umbe schouwen/und sach vil juncfrouwen,/die ir gesindes wâren: (Iw 5199-5201)

vil schiere begunde er si ane sehen. (Er 163)

nû was er komen ûf ir slâ/und ilte in vil sêre nâ/unz er si begunde sehen an. (Er 5378-5380)

知覚動詞は現代語では一般に beginnen と共起しにくいと思われるが、その中でも anstarren, zuhören といった主体の意志的な行為の場合は無理ではないかも知れない。しかし、sehen（見る、見える）、hören（聞く、聞こえる）のように主体の意識的な「行為」か、あるいはそうでない「自発」の二様に解釈される動詞の場合、「自発」の意味では beginnen はまず共起不可能であろう（??"Ich beginne die Sonne zu sehen."［「太陽が見え始める」］）。ところが右のヒーレクからの二例においては sehen が一義的に「自発」の意味（つまりヒーレクが後を追っていた者達が見え始める、見えてくる、の意味）で用いられているにも関わらず beginnen と共起している。そして「自発」とは意志的な「行為」よりもさらに超時間的な「状態」であることを考えると、やはり中高ドイツ語の beginnen は「始動相」を表すのでなく、始まりの点を含意しながらもそれが未完了的に継続していく意味を共起する動詞に与える機能をもっていることの傍証と考えられるのである。

このように考えを進めていくと、現代ドイツ語では不自然だとされる「瞬間的性質を持つ完了相」をもつとされる動詞が beginnen と共起する例もむしろ自然に理解されるようになる。

Kriemhilt dô ir kamere/ entsliezen［=öffnen］began. (NL 1270. 5-6)

dô sluog er Wolfharten,/daz er stieben began. (NL 2277. 7-8)

nû mohte sich gelîchen/der schal von den schften/niuwan dâ von windes krefften/ein walt begunde vallen. (Er 2609-2612)

daz gegihte begunde brechen/die muoter von leide. (aH 884-885)

dô sie begunde wachen,/dô hete er si umbevan-

gen.（Gr 370-371）

これらの文例で、beginnen が、それ自体としては「瞬間的性質をもつ完了相」である動詞と共起することにより、それを「未完了相」化することにより、行為・状態（変化）の完了を視野に入れない、一種の「スローモーション」的画像として把えていると考えることができる。例えば Er 2609-2612 を敢えて日本語の表現に置き換えてみれば、「崩れ落ちていく」森の姿がそこには見られることになり、aH 884-885 では（始まってしまった）けいれんに苦しんでいる母の姿にフォーカスが当てられているのである。

3 残された問題をどう解決するか——及び結語

前節で中高ドイツ語における "beginnen＋Inf." の機能を明らかにしようと試みた。それ自体として首尾一貫した記述を行ったつもりだが、ここまでに直接には言及しなかった一つの問題点が残されている。それは例文中にも挙げた denken, vürhten, zürnen といった動詞が、基本的には「状態」（denken は前述の角田の分類に従えば「4類（知識）」、vürhten と zürnen は「5類（感情）」に含まれる）を表す、つまり「未完了相」の動詞だということである。[25] それならば何故これらの動詞が beginnen を伴いさらに「未完了相」化される必要があるのか。

考えられる答えは、これらの「状態動詞」が単独で現れた場合は時間的前後関係から全く独立した純粋な「状態」を表すのに対し、beginnen と共起する場合には「ある行為・ある状態変化の結果としての状態」を表す、というものである。先程の概念図を使えばその差異は次のようになろう。

状態動詞のみ

始点・終点とも視野に入れない純粋な「状態」（→未完了相）

状態動詞＋beginnen

○——→

ある時点の行為・状態変化の結果としての「状態」（→未完了相）

この差異は、例えば同じ「状態」を表す表現として現代ドイツ語で "Sein Gesicht war finster." と "Sein Gesicht war verfinstert." あるいは "Das Fenster war offen." と "Das Fenster war geöffnet." のように、本来

の形容詞と動詞の過去分詞を用いたいわゆる「状態受動」の差異とパラレルなものだと考えられる。

本稿では中高ドイツ語の“beginnen＋Inf.”の例文を現代ドイツ語の“beginnen＋zu-Inf.”のそれと比較し、不定詞で現れる動詞の意義を手がかりに、後者が「恒常性をもたない未完了相」及び「瞬間的でない完了相」のアスペクトをもつ動詞を「始動相」に転換させる機能をもつのに対し、前者はある「行為」や「状態」が（始まりのシグナルとしてのbeginnenの意義が多かれ少なかれ含まれるにせよ）「完了相」のアスペクトをもつ動詞を「未完了相」に転換させる機能をもつのではないかと考えた。このように考えると、中高ドイツ語で「瞬間的な完了相」をもつ動詞がbeginnenと共起する例もより自然に理解され得た。また、もともと「未完了相」をもつ「感情」を表す「状態動詞」が独立して用いられる場合とbeginnenを伴う場合との差異は、「ある「行為」あるいは「状態変化」の結果としての「状態」」という含意をもつかどうかにあるとした。

今回は枚数上の都合よりNL及びハルトマンからの例文を網羅的に挙げることはできなかったが、小稿が少しでもドイツ語のアスペクト研究に資するところがあればと願う次第である。最後に中高ドイツ語と類似の傾向が古ゲルマン語一般にもあったのではないかと思わせる事実として、ゴート語でbeginnenと由来を等しくし、また「始める」の意味で普通用いられていたduginnanが共起する動詞のアスペクトを「継続相の未来形へ書き換え」[26]るためにも使われていたことを挙げておきたい。以下は新約聖書・ルカ福音書第六章第二十五節からの引用である。[27]

wai izwis, jus hlahjandans nu, unte gaunon jah gretan duginnid.

あなた方今笑っている人たちは、わざわいだ。悲しみ泣くようになるからである。

（了）

ハルトマンの諸作品名は以下の略号で指示してある：aH＝Der arme Heinrich, Er＝Erec, Gr＝Gregorius, Iw＝Iwein

（1）日本語の動詞に関して寺村秀雄が「金田一分類」として挙げている、金田一春彦により提案され、その後の動詞のアスペクト研究の出発点となったとされる四分類（1・

状態動詞［イル、アル、要スル、等］、2・継続動詞［読ム、書ク、降ル、等］、3・瞬間動詞［死ヌ、消エル、トドク、等］、4・第四種の動詞［ソビエル、スグレル、似ル、等］）に従えば、これらは2の「継続動詞」に包括されるだろう（寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版 一九八四年、一二三頁以下による）。

（2） 註（1）の「金田一分類」に従えば、2の「継続動詞」を3の「瞬間動詞」へと転じる、という、より明確な記述ができるだろう。

（3） "beginnen＋ze-Inf." の構文は皆無ではないが、少なくとも十二～十三世紀の文献では非常にまれである。R. P. Ebert によれば、現在のように "beginnen＋zu-inf." が優勢となるのは一五〇〇年前後であるらしい（vgl. R. P. Ebert, Deutsche Syntax 1300-1750, Bern/Frankfurt a. M./New York 1986, S. 145）。

（4） Vgl. H. Paul/P. Wiehl/S. Grosse, Mittelhochdeutsche Grammatik, Tübingen [23]1989, S. 312. 因みにこの箇所では "Pinte schrei vnde begonde sich missehaben" という「ラインハルト狐」第百三十五行からの例が挙げられている（下線部筆者）。

（5） Ebd. 「瞬間的性質をもつ perfektiv（momentan-perfektiv）」の動詞との共起の例として、"vber die vallen begon er springen"（ラインハルト狐第三百三十四行）と "beginnet man ime ze gebene rôten win oder blût, […]"（Straßburger Alexander 第四千三百七十九行）が挙げられている（下線部筆者）。

（6） Ebd.

（7） Ebd. S. 313.

（8） NLとハルトマンの例文は次の版から集めた：Das Nibelungenlied, nach der Ausgabe von Karl Bartsch, hrsg. von Helmut de Boor, Wiesbaden [21]1979；Hartmann von Aue, Der arme Heinrich, hrsg. von Hermann Paul, besorgt von Ludwig Wolff, Altdeutsche Textbibliothek Nr. 3, Tübingen [14]1972；Hartmann von Aue, Gregorius, hrsg. von Hermann Paul, besorgt von Burghart Wachinger, Altdeutsche Textbibliothek Nr. 2, Tübingen [13]1984；Hartmann von Aue, Erec, hrsg. von Albert Leitzmann, fortgeführt von Ludwig Wolff, besorgt von Christoph Cormeau und Kurt Gärtner, Tübingen [6]1985；Hartmann von Aue, Iwein, hrsg. von G. F. Benecke/K. Lachmann, Neubearbeitet von Ludwig Wolff, Bd. I, Berlin [7]1968.

（9） この点では現代語でも beginnen の（対格）目的語として、例えば die Arbeit, das Spiel といったやはり Verbalabstrakta が多いと言えるかも知れないが、中高ドイツ語の場合では、beginnen に続く不定詞が普通 ze を伴わないことから、動詞の領域と名詞の領域との「垣根」がより低いと言えるのではないだろうか。この点については後述する。

（10） その他、現代ドイツ語では beginnen と共起すること

が不可能と思える動詞が例文中に含まれているためもある。これについては後述する。

(11) 実は「完了相」・「未完了相」の区別は必ずしも明確にできる訳ではなく、同じ動詞が時には完了相、時には未完了相をもつものとして用いられることがままある。

(12) 慎重を期すために書いておけば、一つの動詞がある時には「瞬間的な」意味を、ある時には「継続的な」意味をもつ可能性も否定できない。その場合、動詞のアスペクトは文脈に依存するだろうが、ただ「典型的な用法」を考えた際、また beginnen との共起のケースを考えた際には自ずと選択の余地は狭まると考えられる。

(13) kurzewîle, des strîtes, der spil, eines spils, wunder が各一例。

(14) der vart, dirre klage, der rede が各一例（中高ドイツ語では動詞 klagen の不定形が beginnen と共起する場合が多かったことも思い出されたい）。

(15) turnierens の一例。

(16) "[…] daz er si wolde twingen." (NL 669. 4)

(17) 「Mhd. における「項」と「意味」との関係」（名古屋工業大学外国語教室『Litteratura』第13号、一九九二年、五七～七八頁）参照。

(18) 同右、五八頁。

(19) 角田太作『世界の言語と日本語』くろしお出版　一九九一年、九五頁参照。

(20) 例外的に1～3類に属するものは jehen［言う］（1類）、war nemen［知覚する］（2類）、biten［待つ］（3類）等であった（前掲拙論六四頁参照）。

(21) 4～7類が「未完了相」であることの一つの傍証として、上に例として挙げた動詞に対応する英語形（know, like, have, be capable of 等）が「進行形（progressive construction）」を作れないことが挙げられる（1～3類では可能）。何故ならば、英語の「進行形」とは本来「完了相」の動詞を「未完了相」に変化させるという機能をもち、元々「未完了相」の動詞はわざわざ「進行形」にする必要がないからである（cf. Ronald W. Langacker, Foundations of Cognitive Grammar, Vol. I, Theoretical Prerequisites, Stanford 1987, p. 256）。

(22) 前掲拙論では、beginnen そのものは（用例の相対的な少なさにより）「主格＋属格」の例に含めず、言及しなかった。

(23) 参考までに現代ドイツ語では (Er 8777-8778) は "Erec fragte, was das bedeuten sollte." (NL534. 7-8) は "[…], bis dann Gunther flehentlich in ihn drang." (NL 810. 7-8) は、"Jetzt kamen auch der König und seine Verwandten auf den Festplatz geritten." (NL 1008. 4) は "[…], dachte sie an Hagens Frage, […]" といずれも beginnen は用いられていない（現代語訳は以下のものを用いた：Das Nibelungenlied, 1. Teil, Mittelhochdeutscher Text und Übertragung, übersetzt und mit einem Anhang versehen von H. Brackert, Frankfurt a.

M. 1970; Hartmann von Aue, Erec, Mittelhochdeutscher Text und Übertragung von Th. Cramer, Frankfurt a. M. 1984.)°

(24) 註(23)で挙げた現代語訳では(NL 823. 7-8)は "Da wurde die schöne Kriemhild sehr zornig." (Er 2632)は "[…], bis er müde wurde, […]" と werden が用いられている°

(25) まだいくつかの動詞は定形で用いられる場合、属格目的語を要求する°

(26) Die gothische Bibel, hrsg. von W. Streitberg, Heidelberg 1971, Zweiter Teil, S. 50 ("es dient zur Umschreibung des durativen Fut.")°

(27) Ebd., Erster Teil, S. 113.

(一橋大学助教授)